

ほし 彩星 だより 第75号



若年認知症家族会・彩星の会会報

平成27年9月16日

〒160-0022 新宿区新宿 1-25-3-302 TEL 03-5919-4185/FAX 03-5368-1956 E-mail:hoshinokai@star2003.jp

7月定例会「ミニ講演会」を聴いて

「認知症の妻と生活して思うこと」

彩星の会会員 山花 洋さん



各地で開催される認知症の講演会は、医師や専門職の方の医学的解説や介護の方法論についての話がほとんどでした。しかし近頃では、ご本人や家族がお話してくれることも増えてきているように感じます。実際に介護に携わり、悩み苦労した方のお話は心に沁みます。そして、介護の中からご自身で見つけられた解決策や心の持ち方・考え方には大変心を動かされます。今回の定例会は会員の山花洋さんのミニ講演会でした。山花さんのお話の一つ一つが私たちの心に響き、介護する者の気持ちの持ち方によって、道は良い方向に開けるのだという大きな指針を頂きました。

山花さんの奥様は現在 64 歳、12 年前に認知症と診断されました。初めに娘さんがお母さんの様子の变化に気付き病院へ連れて行ったそうです。そこで認知症と診断されました。診断を受けてからの 2 年間で一番大変だったそうです。

山花さんは、2 人の信頼できる医師と巡り合いました。内科医と、歯科医です。そのお 2 人から頂いたたくさんのアドバイスが、自分自身の励ましになったそうです。

初めにアドバイスを受けた内科医からは「今どうやったら普通に生活できるのかを考える」ことを勧められました。自分がどうやって生活したいのか。どう生きていきたいのか。生活すること自体が大切なことで、何か必要なことがある時は遠慮なく手助けを求め、ということを教わりました。

その頃山花さんは、奥様の介護が手いっぱい、ご自分の時間はないものと思っていました。しかし、起床してから寝るまでの行動を細かくノートに書き出して見ると、自分のために使う時間が圧倒的に多いことに気が付きました。それなら、奥様の介護のための時間を精一杯使い、それが終わったら自分の時間だと思えるようにしたそうです。そうしたら、介護が大変楽になったそうです。

奥様が大声を出す時期がありました。認知症で通院をしている精神科医に話したところ、安定剤を処方してくれました。そのすぐ後、内科医に相

談をしました。内科医は「精神薬を飲むと必ず副作用が出る。大声を出すのも薬の副作用かもしれない。副作用のない薬がある。それは貴方の体温です。奥様が大声で騒いだら抱きしめてあげるといいのです」と言われたそうです。そのとき、病気は治らないが周辺症状は治るということを教わりました。それ以来、薬は飲んでいないそうです。

怒りなくなったり、叩きたくなることもありました。医師に相談したら「怒っても良いのです。大きな声を出すとストレス発散になりますよ」と言われ、すごく楽になったそうです。

山花さんは、自分で悪いほうに考えないようにしています。すべて良いほうに考えています。介護をするという言葉は使わずに「生活をしている」と考えているそうです。

最近人の温かさを強く感じています。近所の人に奥様のことを話したら、皆さんさりげなく気を使い親切にしてくれるそうです。山花さんがお酒を飲むのが好きだということを知り、近所の方が毎月 1 回お酒に誘ってくれます。近くにできたカフェにも毎週通っています。認知症に理解があり、奥様を見守ってくれるスタッフがいるので、気兼ねなく息抜きができるそうです。

奥様と二人きりで生活をしているとどうしても閉塞感が強くなりますが、近所の人と話す場所を持って幸せだと感じています。

穏やかな時間を過ごすことができるようになり、同じ悩みを持った人たちの話に耳を傾ける心のゆとりも生まれてきました。時には自分の介護体験からアドバイスをすることもあるそうです。

山花さんは最後にこう語って下さいました。「私が幸せになれば女房も幸せになれる。幸せだから笑みが出るのではなく、笑みが出るから幸せなのです」「終末までの課題や不安はあるが、現在の生活をそれほど大変だとは思っていない」。

たくさんの経験と、多くの人とのふれ合いによって山花さんご自身が乗り越えてきたからこそその言葉だと思います。(MY)

7月定例会報告



家族交流会・報告

家族交流会では介護の先輩の経験を聞くことができ、今後の生活準備につながります。今回は山花さんのミニ講演会を聞いた後、山花さんも交えて3グループに分かれて行いました。話し合いの記録は2グループから提出されました。



■グループ①

入院のタイミング、交通事故などの危険回避の方法、相談者不在、特養入所して身体的ケアを依頼し家族は精神的ケアを担うことに決めた、など多岐にわたり話し合いが行われた。

■グループ②(山花さんを交えて8名で話した)

Aさん女性:夫が診断されて1年半、現在休職中。Aさん自身は職場の理解が得られず退職した。疲れが高まっている。

→:在職中に障害年金の手続きをしておくことが大切。障害年金と厚生年金は課税か非課税かで異なるので注意が必要。障害年金の申請は医師とよく相談して書類の書き方を工夫してもらおうとよい。家族会で情報を得て、先手を取ることが重要である。また、介護の疲れに対しては、今の自分の環境を受け入れると楽になる。就寝中の暴力は驚きと腹立たしさなどを感じることもあるかもしれないが、本人には理由がある。ハグすることで本人の不安や緊張を和らげることもできる。

Bさん女性:夫は自分でできると思い行動するが、トラブルになることがある。例えば、修理の見積もりを業者に依頼したが、本人は忘れていた。

→:本人もできる時とできない時とがある。かわり方として杉山孝博氏の冊子や若年認知症者が使える制度のハンドブックの紹介が行われた。(報告:千葉)

本人交流会・報告

猛暑の中、ご本人8人、サポーター11人の参加で交流会が行なわれました。皆さん気温35度の暑い中、来られたので、まず水分補給です。一息つきましたら自己紹介。初めて参加の方もお互いによく知らないながらも和気あいあいだったのは、同じ境遇でつらさを理解しあっているからでしょうか。



次にはほし市場の準備。

今回は篠崎さんが朝早くの出発だったので、農家に仕入れに行かず、トウモロコシ、漬け物、梅干しの3点だけでした。トウモロコシの値段を決め、袋に入れて完了。次は、篠崎さんのピアノ、伊藤直子さんのギターの演奏で『ミニ歌声喫茶』の始まりです。皆さま良く声が出て楽しそうに歌っておりました。ストレス解消になったのではないのでしょうか？

さていよいよ最大のイベント、スイカ割りの始まりです。最初は糺田さんが見本を見せてくれ、何回か皆で練習をした後、いよいよ本番のスイカ割りの開始！新聞紙を丸めて作った座布団にスイカを置き、Tさんが振り落した棒が見事に命中し、拍手大喝采でした。良く冷えてすごく甘く皆で美味しくいただきました。



毎回、試行錯誤しながらの交流会ですが、「継続は力なり」でしょうか。短い時間の中、ご本人さんがサポーターに心を委ねてくれたらと願っております。

かみさぎホームのスタッフの皆様には細かいところ配り有難うございました。(f)



2次会交流会・報告

5月定例会(新宿御苑散策)の集合写真

「たまには野外定例会もいいね」と企画した前々回5月の定例会。新宿御苑に現地集合して、散策&おしゃべりランチ会。たくさんの新緑に囲まれて、みなさんリラックス。笑顔があふれていました。



2次会は西武池袋線富士見台駅の目の前にある居酒屋「さかなや道場」で4時半から始まりました。土曜日だったので集まりが悪いと思っていたのですが、何だかんだ25人集まりました。いつもの常連さんが仕事の為、いないのがちょっぴりさみしかったです。お魚の美味しいお店で、もちろん飲み放題。二部屋に分かれてしまいましたが、隣の笑い声と共に聞こえてくるお話が楽しそうでした。時間切れになってもなかなか腰を上げる人がなく、双方話の続きをしたい方は3次会のカラオケで、ということで店を後にしました。9人がカラオケに残り、まだ歌い足りない? 飲み足りない? ところでしたが、お開きとなりました。(バア)



ESSAY ESSAY

エッセイ

ESSAY ESSAY

『胃ろうについて考えさせられること』 龍平四郎

胃ろうについての記事があった。これは同時に、認知症の妻を抱える私自身が避けて通れない問題でもある。

相談者は、83歳の母を介護している娘さんと思われる。内容を以下に抜粋してみた。

「入院するまでは、自宅やデイサービスの場で何でも食べ、トイレにも行けたのだが、誤嚥性肺炎で入院後は、ほぼ寝たきりとなった。食事もゼリー食となって、がりがりに痩せてしまい言葉も少なくなった。主治医には、栄養状態が悪く体力がないので、胃ろうやIVHは勧められないと言われ、退院することになった。

現在は、自宅で500ミリ(210カロリー)の点滴を入れている。肌はつるつるで血色もよく、笑顔があり、こちらの言葉も理解できる。わずかであるが返事もある。だが、点滴以外に何もしないのは、母を見捨てているようで耐えられない。その一方、胃ろうしてまで生きさせるのは、虐待だという意見もある。このまま何もしないで母の死を待つという選択は、生きている価値がないという判断をしているようで私の罪悪感が強い。と言って嚥

下が回復して食べられるようになることや、椅子に座れるようになったり、もっとしゃべったりすることまでは期待していない。ただ、もう少し生きて一緒に過ごしたいと思うだけである」と書かれていた。

この相談内容について医師Aからの回答は次のとおりであった。

「胃ろうの造設は、かなり体力が落ちていても可能です。肺炎を繰り返している最中に造設する事も有ります。胃ろう造設後の一番の問題は、胃内に注入した流動食の逆流です。逆流した流動食を誤嚥すると、肺炎をおこす可能性が高くなります。このため、流動食の注入が出来ないケースも出て来ます。逆流を防ぐには、半固形化食である程度抑制できるようですが、完全に防ぐことは出来ません。

老衰の場合、亡くなる直前までお母様のような状態を保っているケースが多いです。

末期の点滴は、過剰投与になると返って苦しませて死期を早める事も有りますので、私は積極的に行きません。

もっとも500ml位だと過剰投与に必ずしもなる訳では無く、500mlの点滴だけで3ヶ月以上命をつないでいるケースもあります。どうするかは、家族の考え次第になります。今のお母様に対して、いろいろな処置を行っても寿命を数か月伸ばすだけで、その間苦しませる可能性も高いので、何もしないご家族もあります。

『本人が口から摂取できるだけで、点滴などの処置をしない方が、本人は苦しまない』と言うのは事実です。ほとんどの方は、全く経口摂取をしなくなって、7~10日程度穏やかに過ごされています」

その後、相談者から、日を変えて次のような報告が寄せられた。「訪問診療の医師に相談しましたが、『胃ろうやIVHなどで栄養を入れれば、痰が増えたり、痰の吸引の回数が増えたりして、本人に苦痛が増すし、現在の状態が、酸素(1%)を必要とし、動けず食べられず、肺の機能も悪いので、83歳という年齢から考えても、これを寿命と考えたほうが良い。仮にIVHにしても、量を増やせばむくむので、現在の点滴の量500mlより増やすことはできない』と言われました」

施設従事者からのアドバイスもあった。

「現状お母様は文字を読むことはできますか？YES・NOの意思表示はできますか？死の迎え方は本人の意思を尊重したいものです。これについては石飛幸三先生の『家族と迎える平穏死』や『平穏死のすすめ 口から食べられなくなったらどうしますか？』などの書籍を紹介します。高齢者の延命処置の考え方やそれに伴う苦痛に関して知ることができます。決断の一助になれば幸いです」

次は身近で胃ろうを経験している者からの回答である。

「胃ろうはそれ自体は大きな負担がなく実施出来、恐らくお母様でも可能だと思います。胃ろうを入れた後、口から摂れるようになれば除去しても構いませんし、必要がなくなれば胃ろうを抜けば一日もしないうちに傷が塞がります。

しかし、これだけ胃ろうに対して慎重な医療者が多いのは、大多数の場合、患者さんも家族も長く苦しむ事が分かっているからです。胃ろうを入れて再び食事が出るところまで回復される方は1~2%、それも直前まで元気であった方が殆どです。残りの方は、きちんとした栄養管理は出来ても、少しずつ衰弱してしまいます。どんなに注意しても手足の拘縮や褥瘡、繰り返す感染症や

様々な皮膚のトラブル等を完全に防ぐことは出来ません。定期的な経管栄養、薬、オムツ替え、皮膚や口腔のケア、痰の吸引。どうしても生きていて欲しいと覚悟を決めた御家族もくじけそうになるほど胃ろうの介護は大変です。

介護する家族も体調が悪い時もあれば、病気になる事があります。助けて欲しいと思う時もあります。しかもデイサービスやショートステイが可能な場所は限られます。特養はそう簡単に空きませんし、有料老人ホームは高額です。『こんなはずじゃなかった』と思われる方もとても多いようです。

一方で、上記状況が医療者側には分かっているが、やらないという選択をしにくいのが胃ろうの難しいところ。経験した事のない方にはなかなかピンとこないこと。結局『やってみなければ分からないでしょう』と言われれば、その通りなのです。それに医療者も、胃ろうを勧めた方が、気持ちは楽なのです。

最低でもこの状況を想像し、それでもやります、という覚悟と強い希望がないならばお勧めはしません。いずれの選択も後悔する可能性が高い辛い決断になりますが、私には胃ろうをお勧めする事はとても出来ません。

ちなみに、胃ろうがいけないと聞いて高カロリー輸液や経鼻栄養を選択する人もいますが、ご本人・家族の負担はますます増え、デイサービスやショートステイを利用出来る可能性はますます減るので、本末転倒な選択です。それなら胃ろうの方がずっと良いです」

この文章を書いている、私自身も胃ろうの選択を余儀なくされる場面があった。母の妹つまり叔母であるが、口径摂取ができなくなり、主治医より胃ろうについての説明があった。「胃ろうにすれば3年ぐらいは寿命が延びる可能性があるが、しない場合は死が近い」そこで私は、叔母は車いす利用での生活であるが、意思の疎通もでき、食べることを除けば普通の病人であったため胃ろう造設を選んだ。だが、3ヶ月後に誤嚥による肺炎が原因で亡くなってしまった。だが、胃ろう造設の選択は正しかったと今でも思っている。しかし、それが3ヶ月という短期間だったからで、もし長期間となる胃ろうであったならば、果たして正しかったかどうかは疑問である。

私は、以上を踏まえて考えるとき、生命の代弁者は、どちらを選択したとしても後悔は残るのではないだろうか、と思った。



人今人

『これからどうなっていくのでしょうか』

川口市在住 K. K

本人：兄

私が兄の異変を感じたのは、一昨年2013年の1月。実家で兄、私、弟の三人で話をしている時でした。兄が簡単な話についてゆけず、イライラした弟が兄を怒鳴りつけました。兄は両手で頭を抱え「ちがうんだ、ちがうんだ」と言いました。本当に理解が出来ず困っている様子でした。こんな弱い兄を見たのは初めてでした。

すぐに若年性認知症だ！と思い、両腕に鳥肌が立ちました。何で弟は気がつかないんだろう？と絶望的な気分になりました。同時に最近での出来事を思い出しました。長年使っている携帯電話の使い方がわからないと言い出したり、文字を書くのが大変そうだったり、約束をすっぽかしたり、実家に来た際など荷物の置き忘れが多くなっていた事などを思い出しました。

5月になり（この間ずっと病気の事で頭がいっぱいでした）、仕事を辞めたいと言い出したのですぐに賛成し、受診を勧めましたが応じてくれず、ずるずると7月の半ば過ぎになってしまいました。そして、とうとう兄の職場の上司から私に電話があり、会うことになりました。

職場での話しを聞くと自分の名前がスムーズに書けない、書類が作れない、ネクタイが結べない等々、私が思っていた以上に働ける状態ではないと思いました。上司も早く辞めてもらいたいようでした。今思うにこの頃は急速に記憶が衰えていった時期だったと思います

強引に病院に連れて行き問診、CT、MRI、脳血流の検査をすることになりました。この間、本人はいたって健康、自分は病気ではない、今の仕事は辞めるがすぐに他の仕事に就けると思い込んでいました。職場でのトラブルは人間関係のせいと思い込んでいたようでした。

そして結果は若年性アルツハイマー。兄は何が原因？いつの時点で？食べ物のせい？治るのか？本を読んだり、ネットで調べたりしていました。そして半年間休職した後2014年3月、53歳で早期退職をすることになりました。世の中の50代は色々悩みもあるだろうけれど元気に働いている。そう思うと悔しくてしょうがありません。そして実家の家業の手伝いをリハビリとし、今に至っています。

母が認知症で兄の病気がわからないのがせめてもの救いです。父は脳梗塞の後遺症が少しあるものの、まだ頑張っています。

一週間前、目が痛いと言うので近くの眼科の場所の説明を始めたところ、目印になる自宅近くの川、信用金庫、スーパー、本屋がわからなくなっていました。それでも人に聞きながら眼科に辿りつけました。最初に聞いた人には馬鹿にされたと怒っていました。たぶん何度も同じ事を言ったのでしょう。（すぐ後から追いかけて私も診察室に入り目薬は余分にもらいました）

そして今日、テレビにうつる時刻2:11(午後)と兄の携帯電話の14:11、何で時間がちがうんだ？と言いました14:11は午後2:11だよといってもわからないと言いました。午後3時と15時もわからないと言いました。これからどうなっていくのでしょうか？



今年も行ってきました北海道！

～楽しかった北竜町ロードレース～



来年はぜひ皆さまも一緒に！



都立松沢病院精神科医師
ことう
厚東 知成 先生

箱物での診療に飽き飽きしていたところに、干場さんからお声が掛かって、渡りに船。北竜町の夏の

風物詩、ひまわりマラソンに初参加させて頂きました。

当事者の伴走のはずが、走り出すと自分のペースを守るので精一杯。気がつけば集団はばらけて、右も左も黄色い向日葵が風に揺れ、頭上には蒼い空が広がっていました。聴こえるのは、おのれの鼓動と荒い息遣いだけ。

「足を休めずに走り抜くこと」を口のなかで唱えながら、無事完走することができました。当事者の方、彩星の会の面々、ボランティアの皆さん、それぞれに自

分の目標を達成した充実感で、素敵な笑顔のゴールインとなりました。

とくに今年診断を受けたばかりのNさん。同じ5kmにエントリーされたのですが、途中で足が攣るアクシデントに見舞われながら、つま先立ちで懸命に走っておられました。その不屈の精神に心揺すられました。

競技後は北竜町の皆さまや北海道家族会のお招きで、大バーベキュー大会。農協の広い敷地が煙で充満し、お酒もやや入れば、やんやの大懇親会。北海道の認知症医療やケアについても、貴重なお話を伺うことができました。即席でこども歌舞伎や演芸大会まで始まって、北竜の暖かいホスピタリティに感激しました。

旅を通じて印象深かったのは、東京からいらした当事者の方と、温泉に三度も一緒できたこと。お湯に浸かった瞬間に、笑顔がほころぶのが素敵でした。

また入浴介助で、的確なサポートの難しさも感じ、とても勉強になりました。声を大にして述べたいのですが、このひまわりマラソンは最高の体験です。来年も私は参加させて頂くので、皆さまもぜひ一緒に！

彩星の会のみなさんと走った 「第51回北商ロードレース大会」

若年認知症家族会「空知ひまわり」
事務局 中村道人



今年も「ひまわりの里」の向日葵が大輪の花を咲かせ、国内をはじめ海外より265,000人の観光客が北竜町を訪れました。全国的に異常気象と言われる中、ここ北竜も例外ではなく7月中は低温が続き、向日葵の発育が心配されましたが、8月の異常気象のお陰で例年以上の開花をしてくれた結果となりました。

「空知ひまわり」が設立し8周年を迎えた今年は、北竜町と製薬大手のエーザイ株式会社との間で「認知症対策・地域包括ケアの推進に関する包括的連携協定」を6月に締結し、認知症に対する取り組みについて相互の連携が強化されました。その事業の一環としては8月8日に「認知症フォーラム IN ほくりゅう」が北竜町公民館で開催され町内外より170名の参加により盛会に行わ

れました。このフォーラムの中で北竜町出身の44歳の方が若年性アルツハイマー病を公表し、私たちの家族会の中に参加するきっかけとなりました。



また、8月23日に開催された「第51回北商ロードレース大会」では、選手38名、応援25名の参加を頂きました。東京彩星の会、小澤代表様、篠崎事務局様をはじめ、若年認知症サポートセンター宮永和夫理事長様、比留間ち

づ子副理事長様、勝野とわ子理事様、遠藤事務局様をはじめ、秋元先生、厚東先生、更には名古屋、東京、千葉、埼玉からも参加を頂きました。

また、北海道内からも若年認知症の家族会「札幌：北海道ひまわりの会」「苫小牧：東胆振ひまわりの会」更には、これから家族会が設立される旭川からの参加を頂きました。今年で5年連続のご支援を頂いているエーザイ株式会社から「オレンジのTシャツ」の寄贈を賜り、ロードレース大会に華を沿えて頂きました。

レース後は会場を移し、参加された皆さんがバーベキューで舌鼓を打ち、ビールを片手に懇親を深めさせて頂きました。



ひまわりの里の向日葵も後半の開花となり、少し残念ではありましたが、当日は早朝よりご支援、ご協力を賜りましたことに深く感謝とお礼を申し上げます。



短い北海道の夏もひまわりの開花に合わせて、終えようとしています。

間もなく、稲刈りの時期を迎える北竜町ですが、今後とも多くの皆様のご支援、ご指導、ご鞭撻を頂きますよう切にお願い申し上げます、お礼とさせていただきます。ありがとうございました。



介護者の話♥題②

『便失禁』

Q:困っております

なぜか畳の汚れを防ぐため敷いたビニールシートも剥がしてしまいます。にも拘らず、いつもトイレには間に合わず歩きながら尿も垂れ流し、糞尿まみれ、便が付いた足、手であちらこちらを触るので部屋中悪臭だらけです。お知恵をお願いします。

A:施設従事者

強引なやり方ですが、紐付きズボンを前後逆にはいてもらい、後ろで苦しくない程度(手はズボンの中に入れてない)に縛るといった方法があります。トイレまで自己処理できないようになります。またオムツ内に出た便を処理するという形にもできます。便処理の過酷さをしていきますから、在宅でのつなぎ服の使用もわたしは否定しません(施設では生命にかかわらない限りしません)。 (龍 平四郎)

6月6日~7日

「彩星の会旅行に参加して」

中野めぐみ

彩星の会家族旅行一泊二日の旅(白子温泉と水郷佐原水生植物園)に初めて参加させていただきました。

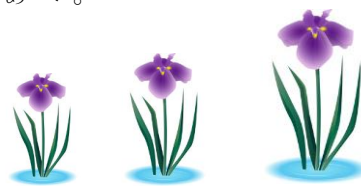
行き帰りのバスの中では伊藤(直)様のすばらしいギターの生演奏、なつかしい曲、次から次へと唄うことができ心も体もだんだん楽しくなりました。

白子温泉に到着するとさっそく温泉へ、ボランティアの方が移動入浴、介助すべて自然体!!私にはできない事だなあ〜どうしてそんなにできるんですか?と質問しました。「私も夫のことで、ボランティアの方が良くして下さいましたよ♪♪」頭が下がります。

カラオケ大会では我を忘れ夫を忘れ(?)唄い踊り(同じアホなら踊らにゃあ〜損々)笑い、そして又、マッサージまでして頂いちゃいました。

翌日は佐原の水生植物園。花しょうぶが東洋一の150万本も花盛り。嫁入り舟(サツパ舟)の花嫁さんと逢うことができました。

夫と二人で泊まる旅行はもうできないだろうと思っていましたが、こんなすばらしい時間を与えてくださってありがとうございました、又連れて行って下さあ〜い。



お知らせ

■9月定例会は

日時：9月27日（日）13：00（12：30 受付開始）

会場：（社福）武蔵野療園「渋谷区けやきの苑・西原」

渋谷区西原2-19-1（別添地図参照）

内容：①ミニ講演会 / 家族交流会

演題：「口腔ケアと嚥下のはなし」～あなたの健康のために～

講師：東京歯科衛生士会 歯科衛生士 河相ありみ氏

②本人交流会「秋の味覚とミニミニ運動会～新米おにぎりと玉入れ？～」

（ミニ歌声喫茶 / 「ほし市場」 / 新米を味わう、その他）

参加費：お一人500円

ご用意：上履き靴（スリッパ不可）

申し込み：ご本人同伴のかたは準備の都合がありますので9月25日（金）までに **必ず** 事務局にお電話でお申し込み下さい **電話番号：03-5919-4185**

■講演会「若年認知症の現状と課題」のお知らせ

日時：9月26日（土）午後1時半～3時（予約不要、入場無料）

新宿区立障害者福祉センター 新宿区戸山1-22-2 TEL03-3232-3711

講師：彩星の会世話人 三橋良博

★事務局からお願い★

2015年度会費の納入がまだお済でない方はよろしくお願ひします。

「家族の会」の運営は、会員の会費によってささえられています。

現在介護中の方だけでなく、看取り終えた方々も、ぜひご支援を継続していただきますようよろしくお願ひいたします。

■ご相談・ご入会は 彩星の会事務局 までご連絡ください

【相談日】月、水、金 10時30分～17時 電話：03-5919-4185 FAX：03-5368-1956

携帯電話：080-5005-5298（相談室：干場）

e-mail：hoshinokai@star2003.jp HP：<http://star2003.mdn.ne.jp/>

■年会費 家族会員 5,000円 賛助会員 A5,000円/B3,000円/C10,000円

■お申込み（ご入金）は下記振替口座宛てにメッセージを添えてお願ひします。

郵便振替口座番号：00170-7-463332 加入者名：若年認知症家族会・彩星の会



編集後記

猛暑の夏もあつという間に終わり、通勤風景がいつもの日常に戻った。電車のドアが開いた途端、我先に乗り込む人達。女性専用車に座り込んだ若い女性達がいきなり化粧をしだす。終わると居眠り。絶対譲らない強固な意志のもと、杖をついている人を前にしても座り続けている。そんな様子を目の当たりにすると心が悲しい。ましてや障害を持った人達のことを思うと辛い。もっと世の中がやさしくなったらいいのにとするのは私だけでしょうか。（ばあ）